

平成23年度留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）採択プログラム

学長主催のトップクラス学生向け 日米協同教育プログラム

福岡工業大学 評議員／カリフォルニア事務所所長 米田 達郎

Tatsuro Yoneda

福岡工業大学（福岡県福岡市）は、「情報」「環境」「モノづくり」の3分野を主体に丁寧な教育を実践し、社会に貢献できるグローバル人材の育成をめざしている。「For all the students ～ すべての学生生徒のために」を経営理念として掲げる本学では、世界の高等教育での学生・教員の流動化の高まりを受けて、教育の質保証とともに大学の国際化を重要な課題と捉えている。

昨今、グローバル人材育成に関して多くの提言がまとめられている。例えば、グローバル人材育成推進会議の中間まとめによれば、語学力を含むコミュニケーション能力とともに、主体性をもって物事に取組み、日本人としての誇りを胸に、異文化を理解する能力がグローバル人材に必要とされるとまとめられている。

本学の国際交流は、米国を戦略的な基軸として、東アジア、東南アジア地域の大学と展開している。基軸となる米国においては、カリフォルニア州立大学イーストベイ校（以下、CSUEB）と大学経営陣レベルでの深い交流が進み、学生や教員の派遣や受入れのみならず、職員の研修プログラムを通じて、両大学がお互いの大学経営において抱える課題を共有し、活発な議論を交わす機会を実現している。

日本人の留学先が米国を中心とした北米地域からアジア地域へとシフトし、特に米国への日本人留学生数が減少していることは確かではあるが、大学の国際交流領域での学生支援、とりわけ経済的な支援体制を確立し、米国への留学とアジア地域への留学での学生が負担するコスト差を縮めることにより、多くの学生が米国への留学を希望すると本学では認識している。



CSUEB リロイ学長と本学下村学長を囲んで

2011年度から予算計上されたショートステイ・ショートビジットは、長期留学する契機になりうる短期の「気づき留学」に対する奨学制度であり、大学にとって有効性が極めて高い政策である。今回は、ショートステイ・ショートビジットに採択された「学長インターンシップ型日米協同教育プログラム（通称 ACE プログラム）」を、米国学生の受入れおよび日本人学生の派遣を一体化したプログラム例としてご紹介する。

【プログラムの特徴】

ACE プログラムは、本学および CSUEB の先導的トップクラス学生を対象としたグローバル人材育成プログラムである。日米大学生間でのディベートの機会を創出し、学習成果の相乗効果を生み出しつつ、国際化に対する本学教職員の意識変革を目指したプログラムとなっている。

本学が遂行する ACE プログラムの大きな特徴は 3 点に集約される。

1. 日米両大学の学長・副学長クラスが直接関与する
2. 日米の選抜学生が、日米両大学で教養講座を一緒に受講する
3. 日米の教員が、教授スタイルの違いをお互いに確認できる

日本の学生が米国に滞在中は、CSUEB の教職員・学生がホスト役となりプログラムは進行し、逆に CSUEB の学生が日本に滞在中は、本学の教職員・学生がホスト役となりプログラムは進行する。ただし、ホスト役は現地でのプログラム運用を担うという意味をもったホスト役であり、事前のプログラム内容あるいは事後の教育効果の確認については、日米両大学が情報共有して進める形をとっている。プログラム全体像を日米両大学が共同企画、つまりショートステイ・ショートビジットを一体化したプログラムを立案する形をとることで、学生のみならず教職員も、異なる文化を背景とした価値観を共有する必要が感じられる機会を創出し、FD の見地から日米両大学の教員が新たな教育的知見を得られる場となるように意識している。

プログラムを統括し、米国でのプログラムに本学学生を引率した、学長下村の感想は次のとおりである：「今回のプログラムでは、すべての学生が英会話能力に秀でた訳ではない。それでもなお、異文化に接し相手の意図するところを理解せねばと言う緊張感を持った講義やアクティビティを通じて、学生の意識が劇的に変化した。ショートステイ・ショートビジットの期間中及び終了後のレポートや懇談において、その変化は顕著に認められた。日本理解の共通テキストとして“菊と刀（ベネディクト著）”を採用したが、米国人学生と濃密な時空間を共有するという環境下において、日本人学生にとって、日本とは何なのか、日本人のアイデンティティ及び自分の立ち位置を考えさせられたことが、窺えた。」

【昨年度の ACE プログラム内容】

約 2 週間の連続した ACE プログラムは、前半に本学学生が CSUEB に入り、後半に CSUEB 学生が本学に入るという日米双方向で行き来する形となっている。

プログラム初年度であった昨年は、本学から 13 名、CSUEB から 8 名の特待生が ACE プログラム生として選抜された。学生の選抜は、本学側は GPA による成績評価をもとに、生活態度まで加味した推薦リストを各学科から学長に上げる形となってお

り、CSUEB側はGPAによる成績評価に加えて、学内外でのリーダーシップ活動を加味し、面接によって特待生を選抜し、学長が承認する形となっている。

プログラム内容は、教養から専門へと繋がるキャリア構築を意識した上で、主に講義とアクティビティによって構成されている。CSUEB側でのプログラムでは、グローバルに活躍する人材に共通する要素である「共感をベースとした主体的に考える力」の育成を重点に掲げ、日米の学生が社会的に自立したプロフェッショナルを目指したキャリアプランを意識できるように、日米参加学生にCSUEBの教職員も加わってのディベート、あるいは米国で活躍する講演者による講義が設定されている。実際の講義テーマは、地球温暖化、エネルギー政策、起業論、日米文化比較など多岐にわたり、講義を担当する講演者は、学長、副学長を含む大学関係者のみならず、日米双方の外交官、知事経験者、起業家、弁護士、公認会計士などユニークな顔ぶれとなっている。

プログラムは、CSUEBにおいても、本学においても、すべて英語で実施されるため、講演者には本学学生が理解できるような簡易な英語での講義進行を事前に依頼している。本学では、本学からの参加学生が伝えたいことが伝えられないもどかしさ、つまり言葉の壁を実感することを、積極的にプログラムのプラス効果として評価する基本方針を共有している。あくまで、プログラム参加後の語学勉強につなげる「気づき留学」となることを目指しつつも、プログラム期間中は、言葉の壁が学ぶべき教養レベルを下げないように最大限留意している。

実際の講義形式を、担当する講演者の自由裁量としたことで、多くの講義スタイルが共有される場を生み出すようにした点についても触れたい。教員がモデレーターとなり、実際の授業は事前に指名された学生が進める講義形式。円卓会議のように円状に座りディスカッションを中心として進める講義形式。従来のレクチャー型ではあるが、学生たちからの質問をつなぐだけで構成される講義形式。教員と学生の区別がなく、教員混在で進める講義形式。その多くが米国の大学においては通常見られる形式とはいえ、本学の学生にとってはまったく馴染みがない形式が大半であり、講義の進め方を理解しつつ、授業に参加していくプロセスそのものが学習の場となっていた点は大きい。本学教員にとっても、米国の大学における教授法を直に観察し、さらには日本人学生が対応できる幅を確認できる好機となったことは言うまでもない。



CSUEB リチャード理事長の講義風景

アクティビティでは、たとえば、禅・茶道・華道を日米学生と一緒に体験できる場を設けた。筆者個人も、日本人学生を対象とする日本の大学での講義、そして米国人学生を対象とする米国の大学での講義を通じて感じるのだが、一般論として、米国人学生は日本人学生と比較して、質問力に勝り、分からないことは人に聞くことで学んでいくという学びの姿勢が身に付いていると感じる。ACEプログラムの中で、本学

が日本文化に触れることをアクティビティとして設定した根拠は、米国人である CSUEB 学生向けに日本文化を体験する場を設けたいという意識以上に、日本人である本学学生が英語環境において日本文化を学び、さらに海外に出ると各人が「日本という背番号」を背負う感覚を体感してもらうことを強く意識して設定したものである。CSUEB 学生から矢継ぎ早に受ける質問に、日本人として必死になって答えるプロセスを通じて、本学の学生が単なる文化体験以上のものを学んだことは言うまでもなく、本学が意図するグローバル人材育成の観点から教育的効果は非常に高いと言える。



パークレーにある好人庵禅堂での秋葉氏講演風景



CSUEB と本学学生の集合写真

【来年度以降の ACE プログラム】

ACE プログラム立案において、参加学生の主体性を育むことを目的として、プログラム立案の一部を学生に委ね、学生の立案に基づき教員と議論し決定する場をプログラム実施前に設けていた。日本の多くの大学が進めるところの従来型の短期研修プログラムでは、大学が決定したプログラム内容やスケジュールを募集要項に記載し、プログラム参加を希望する学生を募る形が圧倒的に多い。本学の従来型プログラムでも、主体性を持たせるべき学生を、プログラム立案プロセスに積極的に取り込む仕組みが存在していなかったと反省している。多くの短期研修プログラムが、海外に出て文化の違いにふれ、主体的に考える契機となることを標榜しているにもかかわらず、プログラムそのものに学生の主体性を組み込まない矛盾をはらんでいるとも言える。このような、グローバル人材として主体性の育成を求めつつ、暗黙の了解として、学生は大学が設定した枠からはみ出すことを認めないプログラムとならないように、ACE プログラム立案時に強く意識した。従来型プログラムでも、学生の声を反映しているという反論はあっても、プログラム参加の感想文あるいはプログラム後の集いで集約した声を、次年度のプログラム改善につなげるという形が大半であり、プログラム前さらにはプログラム進行中に、実際に参加している学生たちの声を集めて、プログラム改善を進めていくプロセスに取り組んでいる例は少ない。米国だけではなく、本学学生の声を取組む仕組みを整えたいと考えている。

また、CSUEB 側は、既にピアメンター制度と呼ばれる、2年生が1年生の授業に教員とともに参加する仕組みを構築している。従来の TA とは異なり、ピアメンター

は授業立案から授業改善評価、あるいは学生の個人面談まで含めた役割が求められる。学生たちにとっては、大学の授業を改善する声や、学生と教員の間で共有される場が用意されており、一方、教員にとっては、捉えきれない学生たちの声を耳にする機会となっている。大学の教育改善に学生を直接的に巻き込み、年次を超えた学生コミュニティを実現した好例として、ACEプログラムに積極的に取り込む予定である。

さらには、英語での講義内容が若干難しくなった場合に、どこまでどういう形で日本語での通訳あるいは日本語での解説を入れるかという点で、プログラムに関わった教職員は大変苦労したことも事実である。来年度以降、学生選抜にあたり、語学力をどのように選抜要素に加えるか、教育的観点からの検討を進める必要があると認識しており、プログラム推進に当たっての検討課題となっている。ACEプログラムは、学生が自身の生き方を考えるきっかけとなるように構成されている。すなわち、講演者に高い語学力を有するグローバル人材を配することで、コミュニケーションツールとして高い語学力を身につける必要性を、学生たちに伝えずとも伝わるように設計している。このことから、プログラム参加以前の英語成績によって、選抜が大きく左右される必要はないという認識で、本学とCSUEBは理解を共有している。

【大学の国際化を見据えた今後の展開】

育成する具体的な人材像として、多くの大学がグローバル人材に相当するような人材像を掲げている。また、18歳人口の減少を強く意識し、大学の国際化は、大学経営者にとって最重要項目の一つと認識されている。しかし、現実には、国際化が国際担当理事あるいは国際交流担当部署の仕事という感覚をもった大学人は多い。大学本流とも言える教務部門から切り離された構造になっていると同時に、一部の理解ある教職員がボランティアベースで国際化を推進しているという残念な話を多く耳にする。

また、教員同士のつながり、つまり点と点がつながり、研究室単位で線の交流になっていく交流事例は多く紹介されるが、大学レベルでの面の交流へと昇華した事例は少ない。研究者同士のつながりから発展する国際的な人的交流は非常に重要であるが、大学がシステムとして国際化を推進するためには、点と点をつなぐ線の交流レベルだけでは将来性に乏しく、提携をする両大学経営陣レベルが交流を意識できるような面の交流へと発展させることが必須となる。この点を考慮して、本学では提携校の数を増やすことよりも、大学経営陣同士が語り合える交流体制の構築に力点を置いて国際戦略を練っており、比較的恵まれた国際交流プログラム立案環境が整ってきたと考えている。

さらに、一般的な短期研修プログラムの多くは語学を中核に据えており、その教育的な効果について教員の中で議論が分かれることも事実である。多くの場合、語学プログラム運用を米国大学付属語学学校に依頼するため、米国大学本体の教員関与が少なく、日本側は大学、提携先大学側は大学付属語学学校という国際交流形態になっていることも多い。本学においても、提携するCSUEB付属の語学学校 American Language Schoolとの連携による語学研修を設置しているが、大学レベルの教養を授ける指導体制は付属語学学校には存在せず、また米国に本学学生を派遣するものの米国人学生との交流機会は限定されるという問題を常に抱えている。

本学では、ショートステイ・ショートビジットを活用しつつ、さらに学生負担を下げて米国への「気づき留学」の機会を創出していく必要があると考えている。さらに、実際に気づいた学生たちのリーダーシップを育成するための教育体制を刷新する必要がある。大学の国際化という大きな視点を忘れることなく、一人一人の学生たちの将来に資するプログラムを目指し、これからもより充実したリーダーシップ育成環境を整えていきたい。

将来を担う若者は次々に大学より巣立っていく。大学の国際化は、まさに待ったなしである。